



国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2010.11
No.11

テキスト布置の解釈学的研究と教育

CONTENTS

- 大学院学生海外派遣事業調査報告 02
- グローバルCOE国際研究集会 03
- 教育プログラム 2010年度講義科目の紹介 05
- 研究活動
グローバルCOE講演会 09
オープン・レクチャー 10
グローバルCOE研究員ブリーフィング 11
海外出張報告 11
- Report & Information 12





2010年度 大学院学生海外派遣事業調査報告 第1回

グローバル COE では、「大学院学生海外派遣事業」の募集を年2回行い、博士課程後期課程の学生に対して、課程博士論文の執筆に必要な海外での調査を支援しています。募集に際して博士論文執筆計画および海外調査計画を提出してもらい、グローバル COE 学術委員会の下に設けられた選考委員会で応募書類を審査し、さらに面接を実施して支援する海外調査を決定しています。2010年度の第1回目の募集で採用された神山さんの報告書を以下に掲載します。

マオリの木彫り彫刻に関する解釈学的研究： ニュージーランド都市部におけるマラエとマオリコミュニティの事例から

ニュージーランド

神山歩未 ● 文学研究科 文化人類学・宗教学・日本思想史 博士課程後期課程2年

海外派遣プログラムにより、6月から8月までニュージーランドに渡新し、都市に生きるマオリコミュニティに参加し、彼らの日常の様子や知識を吸収する機会を頂いた。

もともとマオリは、それぞれの地方において、親族集団でつくられる Hapu (sub-tribe) とよばれるコミュニティを形成しており、その成員は、共通の先祖からつづく系譜を持ち、それが強いつながりを作り出していた。そして、その系譜とつながりこそが、マオリのアイデンティティの源だと言われていた。しかし、白人の入植の結果、1920年代ごろから、仕事等をもとめたマオリの都市進出が急速。現在、マオリの約80%が都市部に住んでいる。急速な都市進出は、都市で生まれ育ったマオリを生み出し、自分の出身部族をしないマオリを生み出す結果になった。そうした都市のマオリも、現在、「マオリ」としてのアイデンティティを求め、部族の垣根を越えた新たな都市のマオリコミュニティを形成している。今回のプログラムで、私自身が訪問したマオリコミュニティも、そうした都市のマオリコミュニティのひとつである。親族集団と異なり、都市マオリコミュニティは、



共通の祖先から続く系譜を基に、繋がっていない。しかし、コミュニティの成員から、そんなコミュニティが彼らにとっての Hapu だというコエを聞いた。そして、都市のマオリのコミュニティも、親族集団のような強い繋がりをもっていることを、見てとることができた。

このようなコミュニティでは、日々、次の世代へとマオリの知識をつたえようと、コミュニティ創設に携わったお年寄りたちにより、若い世代へと伝えられている。ここで伝えられるマオリの知識とは、マオリ語をはじめ、マオリの歌、麻の織物の制作方法、儀式の行ない方などである。

また、言葉だけではなく、私が訪れたコミュニティでも団結のシンボルとしての Marae (集会所) を建て、内壁面を彫刻で飾り、“マオリらしい装飾”で飾っている。

今回のプロジェクトにより、そうした都市のマオリコミュニティにおけるマオリ文化活動と、彼らのシンボルとしての Marae、またその装飾である木彫りの彫刻を実際に見て、話しを聞き、考察する機会を得ることができた。

今後、彼らの活動に対し、更に理解を深めるとともに、今回派遣されたオークランド大学ジェームスヘナレマオリリサーチセンターで収集した資料とともに、参与観察により得られたデータを、博士論文執筆に反映させていきたいと考えている。





ことばに向かう日本の学知——テキスト解釈の集積としての学史——

9月9日から11日までの3日間、第9回名古屋大学グローバル COE プログラム国際研究集会「ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—」をテーマに、過ぎ去らぬ猛暑の中、開催された。初日は拠点リーダー佐藤彰一教授の挨拶のあと、カレル・フィアラ教授（福井県立大学）による「言語作品の総合モデルと古代・中世の日本文学作品への応用」と題した特別講演が行われた。

フィアラ教授は、プラハ学派以来の機能論言語学理論に立脚して、記紀神話の諸類型、万葉和歌の編集の再現、源氏物語や平家物語生成過程に見る「再文脈化」の構想が提案された。

10日、11日両日にわたる研究発表会では、古代から近代にいたるまでの日本における言語研究史の最先端の幅広い研究成果が提案、討論された。金銀珠氏は、日本文法学の近代化過程において欧語の「be 動詞」解釈が形容詞をめぐる品詞分類に影響を与えたことを論じた。宮地朝子氏は、山田文法の「喚体句」の発想の淵源が心理学者ヴェントの *Ausfungssatz* (喚呼・句) に由来することを考証し、山田文法の「文(句)」定義にいたる前史を解明した。小柳智一氏は『手爾葉大概抄』の「詞＝客体的表現」、「手爾葉＝主体的表現」という今日通行の時枝誠記による解釈に疑義を呈し、本書が「詞」と「手爾葉」の二分法を目指したのではなく「手爾葉」を特徴づけることに本旨があったとした。松澤和宏氏は、ソシュールは、言われるような「一般言語学」を構想したのではなく、自然科学と一線を画した歴史的考究としての「言語科学」を構想したこと、その際語る主体の意識を媒介にして時間が濃厚に関与した共時言語学が立ち上がったとした。狩俣繁久氏は、琉球文学と並行して行われてきた琉球方言の研究史の蓄積を報告し、多様で複雑な様相を呈する同方言の研究は諸言語共同体の内外の人々の協力が不可欠であるとした。李漢燮氏は、19世紀末にソウルで発行された韓国最初の新聞『漢城旬報』『漢城週報』における外信記事の情報源であった中国や日本の新聞との関係の観察を通じて近代漢語として新たに取り入れられたものが1000語を超えたとし、韓国語語彙として定着したかどうかの判定基準に語彙研究史を利用しようと述べた。ズデンカ・シュヴァルツォヴァー氏は、



は、詩的な表現と劇的な表現の生成プロセスを謡曲『鸚鵡小町』のテキスト分析を通じて、詩的な詞章と劇的な詞章をつなぐ精神的な相互連関を提起した。

2日目の発表会では、釘貫亨が近代日本語研究における教養主義に代わる専門的学知の創業者として、橋本進吉を取り上げた。山東功氏は、明治前期の国語研究アカデミーの枢要の地位を占めた国学者が音義説や神代文字など荒唐無稽の学説の跳梁を抑え、言語学導入を速やかに実現させた役割を強調した。安田直道氏は、石塚龍磨が『仮字遣奥山道』草稿本で認めた上代の音韻対立の考えをのちに削除したことを賀茂真淵記念館(浜松市)所蔵の『古言別音鈔』の写本の検討から明らかにするとともに、橋本進吉による古代の音韻の反映という龍磨の考えがのちになって表明されたという推測が逆であったことを明らかにした。肥爪周二氏は、悉曇学が『韻鏡』を導入して鎌倉時代に大きく展開し、その後も近世期に文雄を契機に独自の自律的な展開を見せたとした。岡島昭浩氏は、近世語学諸書に見られる「軽重」の用例を渉猟し、その用法の多様性を照射した。齋藤文俊氏は、明治以後厳しい評価にさらされた近世後期の漢文訓法、佐藤一斎点の原漢文復元を目指した独自の合理性から説明した。今野真二氏は、『言海』掲出項目の和語、漢語、唐音語素と漢字表記および振り仮名、語積などが明治の書記言語の全般的実態と連続するのではないかとの構想を提案した。

3日間の参加者は、延べ150人を超え、連日の猛暑もものかはその盛況ぶりであったが、これはテキスト解釈の新提案、新資料の報告などが次々に提起されるなど発表内容の水準の高さを反映したものと思われる。

コーディネーター：釘貫 亨 (文学研究科教授)

法テキスト解釈をめぐる2つの研究集会、独仏で開催

グローバル COE プログラム第10回国際研究集会「解釈、そのまたの名は——啓蒙期における法テキストの用法」が2010年10月1―2日にパリのエコール・ノルマル・シュペリウール(ENS)で、また、国際ラウンドテーブル「司法における法判断、または具体的正義への法テキスト解釈」が2010年9月27日にドイツのハイデルベルク大学法学部で開催された。

先に開かれたラウンドテーブルは、法哲学社会哲学国際学会連合(IVR)ドイツ支部との共催で、ハイデルベルク大学法学部の会議室において4部形式で行われた。第1部では、議長の森際康友が開催趣旨を述べた。これまで法学の世界で行われてきた法解釈論は実務家にとって役に立たない、「理論的」営為であった。しかし、必要とされるのは、裁判官や弁護士にとって指針となるような法解釈論ではないか。実務家が具体的事案において悩む解釈問題について、すなわち *Rechtsfindung* の場面において法哲学が何が言えるかを探究してみよう、との提題が行われた。

第2部では、それを受けて、パリ西大学の Eric MILLARD が、最近制定されたばかりの、ブルカなどイスラム教徒女性が用いるスカーフを標的とした、公共の場所での着用禁止を定めた法律を例に取り、それをめぐる解釈問題を解説・提起した。それについての質疑応答の後、第3部で、チリのアドルフ・イバニェズ大学の Fernando ATRIA がおよそ正しい *Rechtsfindung* をもたらすものは何かについて報告し、出席していた20名近くの法哲学者の間で熱心に議論された。これこそ実務家が聞きたいことであり、パネリストの B. KRIX 元判事や C. SEIBEL 弁護士といった実務家からコメントがあった。最後に第4部で、エジンバラ大学の Claudio MICHELON およびハイデルベルク大学の Winfried BRUGGER がまとめと総括を行った。

パリでは、9月30日における予備会議での綿密な打合せの後、法制史家と哲学者からなる学際的研究が二日間にわたって ENS の伝統ある講義室で行われた。初日は、佐藤彰一抛点リーダーによる開会祝辞の録画放映の後、報告者による予告された報告が9時から17時30分まで行われた。まず、ヨーロッパ法制史のためのマックスプランク研究所前所長、Michael STOLLEIS が企画者の1人として開会の辞を述べ、続いて主任企画者の森際が開催趣旨を述べた。18世紀独仏は啓蒙の世紀で、支配的イデオロギーによれば、理性的批判を通して因習や迷妄を排し、合理的な制度・



社会をもたらすことができるはずだが、裁判実務においてこのような合理化が行われていたのであろうか。適用されるべき法が理性批判によって一義化されれば法解釈の余地はなくなるはずだが、どうか。まず実態を知り、それが近代国制・法制の建設にとって何を意味したのか、哲学的反省によればどのような意義が見えてくるか、を探究しよう、と提案された。

報告者の持ち時間は45分であったが、前日の打合せのおかげで、報告時間は30分以下に抑えられ、残った時間で実のある議論が行われた。フランスを代表する法制史家でありこの会議の企画者の1人でもある Jean-Louis HALPERIN および Serge DAUCHY はそれぞれ当時の私版判例集の分析を通して、理由を述べない判決が一般的であったという実態を明確にした後、にもかかわらず、フランス革命以降に開始した、理由を述べる制度に裁判官たちがなぜ直ちに適応できたのかについて説得的仮説を提示した。

これを受けて、Jan SCHROEDER、Hans-Peter HAFERKAMP、および STOLLEIS がドイツを中心にヨーロッパ全土を見渡しつつ、あるいは17世紀における法解釈との関連で、あるいは19世紀におけるあの著名な法解釈論争から振り返って、18世紀における法解釈の特質を浮き彫りにした。これらの史的営為の後、哲学の立場から、Olivier CAYLA、Alexandre THIERCELIN がそれぞれ(18世紀以降になってようやくその偉大さが理解され始めた)Hobbes の自然法解釈、Leibniz の法条件論をとりあげ、また、森際が近代哲学の知識論的アポリアを素材に、「法テキスト解釈」と呼ばれている営為の多様な側面を明らかにした。最後に、憲法学者としても法哲学者としても国際的に活躍する Michel TROPER が全体の総括を行った。

翌日は、初日に明らかになった論点を森際が整理し、フランスでは権威ある法源に基づく結論を一致させる調和的

解釈が主流になったのに対して、ドイツではそれらの間の優劣を論じる傾向が主要となった背景などが議論され、理性と解釈についての素朴であるだけに問題が鮮明化した時代状況における法テキスト解釈について開明的討議が行われた。こうして実質三日間の会議で、法テキスト解釈につ

いて、これまで法制史の世界でも法哲学のそれでも探究されたことのない問題設定で活発な議論が展開され、法テキストを素材にした解釈の隠された側面のいくつかがその扉を開けることとなった。

コーディネーター：森際康友（法学研究科教授）



講義科目の紹介

一昨年度に大学院博士後期課程に入学した方からは、課程博士論文を執筆して学位を取得するにあたりグローバル COE が開講する授業科目から「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論」を各2単位修得することが必要です。またこれらの授業への登録はグローバル COE プログラムが推進する二つの事業に応募する際の条件となっています。一昨年度以前に大学院博士後期課程に入学した方についても、グローバル COE 授業科目に登録し履修していることが、グローバル COE 論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件になっています。開講科目の詳細についてはグローバル COE の Web ページからご覧ください。

テキスト布置解釈学原論 [前期]

重見晋也 准教授 (電子テキスト学)

2010年4月15日(木)・6月10日(木)

On Inherent Perspectives of Hermeneutics

From the very origin of hermeneutics, especially in the occidental tradition, allegorical interpretation is distinguished from grammatical or literal interpretation, especially in relation to interpretation on Homeric texts. Thus, Stoics in Pergamon established a philology of allegorical interpretation in the second century B.C., whereas librarians in Alexandria exercised grammatical or literal interpretation.

Early Christianity inherits these two different types of interpretational attitudes, in order to establish the authority of the Christianity distinguished from the Judaism. The catechetical school of Alexandria, different from the antecedent Alexandrian school, reposes on the combined use of both allegorical and grammatical interpretations, especially for the big debate with the Gnosticism, on the matter of the christian theology and the biblical exegesis. On the other hand, the school of Antioch, through the theorization of trichotomy concept of body, soul and spirit for human beings, favors grammatical or literal interpretations over the allegorical ones.

These two tendencies can be confirmed in the Middle Age, when Thomas Aquinas revised traditional four types of meanings (*littera*, *allegoria*, *moralis* and *anagogia*) into mere two types of spiritual meaning and of literal meaning in his *Summa Theologiae*. It was in the times of the Protestant Reformation that the hermeneutics renewed its traditional approaches by acquiring the rhetoric as art of reading, not of writing or of speaking and by reinventing the idea of “history”, in side of the Protestantism.

The dichotomy between the two principles of

hermeneutics show us two different objectives of hermeneutics. The allegorical interpretation enables and accepts different meanings for a text, whereas the literal or grammatical interpretation tries to eliminate ambiguities and to find a single true meaning. We should also notice with regard to allegorical interpretation that different meanings coexists with synchronic perspective.

If we want to talk with diachronic perspective of plurality of interpretation, we thus enter in the realm of the idea of “hermeneutic circle”. The idea itself was suggested by Matthias Flacius Illyricus in the 16th century and theorized by Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher in the 19th century. It was developed in close relation with Christianity, especially with Protestantism; we took brief outline through discussion on threefold stage of hermeneutics held by French philosopher Paul Ricœur in his *Time and Narrative*.

Ricœur distinguished three different tasks of hermeneutics as “understanding”, “explanation” and “application”, and described possible shift from both attitude of “toward application” and of “by understanding” to “explanation”. This dynamism explains the circular dynamism of interpretation, which may be processed with three stages of reading: from the first innocent reading, through the second reading at a distance, then up to the third “historical” reading. This process of interpretation demonstrates and ensures a evolutive nature of interpretation on a single text with diachronic perspective.

We thus concludes our discussion on objectives of hermeneutics, studies on interpretation. Both synchronic and

diachronic perspectives make appearances of convergence, because an interpreter has rights to pursue a single truth through his act of interpretation, and of divergence, because he also has rights to be in search of totally

different interpretations than existing ones. The observation suggests that the hermeneutics tries to explain how a text can share plural interpretations in parallel, and also how an interpretation on a text can be evolved.

森際康友 教授 (法哲学・法曹倫理)

2010年6月17日(木)・24日(木)

Lecture on the Philosophical Significance of Hermeneutics

After a brief account of the history of the theory of interpretation, or hermeneutics, the aim and structure of Gadamer's conception of hermeneutics were outlined.

In order to understand the philosophical significance of Gadamer's theory, the groundbreaking work by his mentor, Martin Heidegger, in his *Sein und Zeit* was illustrated. In a word, Heidegger overcame the *aporia* of modern philosophy, which Gadamer was able to appreciate and develop in his hermeneutics. The *aporia* can be formulated as follows:

Knowledge consists in the transcendent knowing subject A gaining knowledge of a transcendent object B. Knowledge, as distinguished from belief, is the acquisition of the truth. The knowing subject A knows that object B is so and so if and only if A has possession of all necessary information of the properties that makes true the sentence "The object B is so and so."

How is it possible for a transcendent subject to gain such information about a transcendent object? Even if it were possible, how can the subject know when knowledge is attained without transcending himself into the position of God, who can compare the thought and reality to see if there is a match? The term "transcendent" by definition means that something is unfathomable by another. The Kantian question "how is experience possible" comprises a sub-theme of the question "how is knowledge possible." Man as subject is the central theme of modern philosophy: independence, indeed the existence of man as subject depends on his capacity for knowledge. Hence, proving that man can know becomes the central issue for modern philosophy. However, since the subject is independent and free, the creative subject must be transcendent: the metaphysical presupposition of man precludes the possibility of knowledge. This is the *aporia* of modern philosophy.

All attempts before Heidegger were unable to overcome this *aporia*. It is well known that the Cartesian method leads to skepticism and solipsism. What was regarded as the most hopeful candidate, phenomenology, was also unable to overcome this schematic problem without the philosophizing subject playing God; though some may disagree.

What is the problem here? Is it the assumption that man is a transcendent being? No. Is it that the object is transcendent? No. Is it the dichotomy of knowledge and belief, *episteme* versus *doxa*, which is problematic? Many modern minds do believe this to be the problem: that there is no such thing as *episteme*, what exists are only beliefs supported by reason and evidence, a matter of probability not certainty. This cannot be. The knowledge of your own name, your age, your gender, or your marital status: if such were matters of probability, the world as we know it can no longer be the same. There is nothing wrong with these basic assumptions. Then, wherein does the problem exist and how are we to solve the *aporia*?

The problem lies not in what we can see, but in what we cannot see. In this simplistic scheme of a subject A knowing object B, there is an element invisible, hence hidden, to the modern eye: language. There was a hidden assumption in this scheme; hidden because it was transparent. Language is assumed in this scheme as being a perfect vehicle for transmitting information, so perfect that it seems as if information carries itself from object B to subject A. Language is assumed to be a transparent vehicle of communication.

Obviously, language is not transparent. It needs to be written or spoken. It requires time and energy to transmit information. Language incurs cost. What was missing from the simplistic scheme was this element: language, the vehicle of information.

In the lecture, how the recognition of language changes the basic scheme and brings about what was later coined "the linguistic turn" was explained. Language in its normal everyday state is transparent; when it is working without speech impediment and infelicities in expression. It becomes opaque and visible only when there are such hitches, or intentionally, when used in a pun, or becomes a poem, a work of literature. By thinking through the properties of language using these phenomena as *explananda*, the lecture demonstrated in plain terms how the *aporia* can be dissolved into issues that through research may be given appropriate answers.

釘貫 亨 教授 (日本語学)

2010年7月1日(木)・8日(金)

Japanese Traditional Language study and Modernization of Japanese Linguistics

Key words: TOKAKU as a concept of defining “sentence”
Language as a process, ON’IN as an idea of pronunciation
German metaphysics

Japanese language study has a couple of main streams. One stream flows from traditional study since 12th century. And the other is western linguistics. The traditional study is composed of Teniwoha and Kanazukai. Teniwoha and Kanazukai had constituted the basic framework of the Japanese classical study. This study had been shouldered by the urban literary aristocracy and upper-class Samurai, urban military nobility. This study had continued from Kamakura period to the first half of Edo period, i.e. the 17th century. For the future from the second half of Edo period, the cutting-edge academic support shifted to provincial lower-class samurai from the traditional urban aristocracy and upper Samurai. Provincial samurai’s study of the second half of Edo period had been very demonstrated and rational and practical. Modern language studies in Japan directly depends on the study in this period. This pre-modern Japanese language study provided the modern scientific methods. Modern Japanese linguistics has been based on the thick accumulation of these academic streams.

After the Meiji period (1868–) the introduction of linguistics opened the new stage of Japanese language study. At first modern Japanese grammar was shouldered by scholars out of government since OTSUKI Fumihiko 大概文彦 (1847–1928). YAMADA Yoshio 山田孝雄 (1873–1958) and MATSUSHITA Daizaburo 松下大三郎 (1878–1935) are both top grammarians out of main academic stream of government school. ARISAKA HIDEYO 有坂秀世 (1900–1952) and YAMADA had profoundly considered the theoretical definition on the object of study. ARISAKA had studied in classical phonetics, and YAMADA in grammar. ARISAKA thought what is sound as recognized mentally (音韻). YAMADA thought what is sentence. At the same time, TOKIEDA Motoki 時枝誠記 (1900–1967) thought what is a language. Commonly they referred the metaphysics in Germany. YAMADA’s concept of apperception (TOKAKU 統覚) depends on the theory of Immanuel KANT (1724–1804). TOKIEDA and ARISAKA depend upon phenomenology of Edmund HUSSERL (1859–1938) for their definition “Language as a process” and “sound as an idea of pronunciation”.

佐藤 彰一 特任教授 (西洋史学)

2010年7月15日(木)・22日(金)

Textual and Ideological Deconstruction of Feudalism

- 1) My interest in European medieval history
- 2) Middle Ages as historiographical concept
—We know the names of a number of writers who put it as concept of “medium tempus”. In 1382, Filippo Villani wrote down in one of his works a phrase “priscis mediis modernisque temporibus”.
—“Historiarm ab inclinatione Romanorum Imperii decades” (The Ten History Books after the Decline of Roman Empire)
—Christoph Keller, a German philologist in the 17th century
—the Reformation movement launched by Martin Luther in 1517
- 3) Which type of society the historians saw in the Middle Ages?
—Montesquieu “De l’esprit des lois”, Geneve, 1748.
—Voltaire, J.-J. Rousseau, Adam Smith etc.
- 4) Appearance of Karl Marx and his idea
—all of the human societies starting from “primitive tribal” society to that of communist society, all thorough the slavery, feudal, capitalist and socialist society.
—Karl Marx, “Das Kapital” vol.1, Hamburg, 1867.
- 5) Heavy weight of Marxist theory of historical evolution, especially on academia in Japan
—Alain Guerreau “Le feodalisme: un horizon theorique”, Paris, 1980 : Jerome Baschet, “La civilisation feodale. De l’an mil a la colonisation de l’Amerique” Paris, 2004.
- 6) Feudal theories other than that of Karl Marx
—Jules Michelet, Jacques Le Goff, Georg Waitz, Heinrich Brunner, Charles Martel, Max Weber, Otto Hinze “Nature and propagation of Feudalism” 1929.

Charles Petit-Dutaillis, “La monarchie féodale en France et en Angleterre”, Paris, 1933. Marc Bloch, “La société féodale,” Paris, 1939–1940, HIRIGOME Yozo (堀米庸三)

- 7) Idea of Feudalism as “Tyranny of construct”
— It was in 1974 when the course of things changed. An American historian of medieval France, Elisabeth R. Brown published in “American Historical Review” a critic against an accepted view of Feudalism and feudal society with a title “The Tyranny of a construct: Feudalism and Historians of Medieval Europe”.
—Georges Duby, “La Société aux XI^e et XII^e siècles dans la région mâconnaise”, Paris, 1953.
- 8) An attack frontal given by Susan Reynolds
—Susan Reynolds, “Fiefs and Vassals. The Medieval Evidence Reinterpreted”, Oxford, 1994.
—The idea of this development derives ultimately from a small piece of conjectural history put forward in the early twelfth century by one of the Lombard lawyers whose little treatises were soon after combined into the Libri Feudorum
- 9) Five important points
—1) the relationship between the lord and vassal as

having been described by the lawyers of 16th century can not be traced back to the war-band conglomerate in the early Middle Ages, 2) there has never occurred a junction of the vassalage and the beneficial system, the former remaining mainly means of political ordering, the latter the donation with full and permanent property, 3) So called “vassals” owed service, not because they were vassals of a lord, but because they were subjects of a ruler, 4) Kingdoms were seen as communities and medieval values laid great stress on authority of kings. Public sense was never lost in the thought-world of medieval men and women, 5) In so far as anything like feudo-vassalic institutions existed, they were the product not of weak and unbureaucratic government and expert law that began to develop from about the twelfth century.

- 10) Feudalism and seigniorial regime
—Dominique Balthémy, “L’ordre seigneurial, XI^e–XII^e siècle”, Paris, 1990.
- 11) Weight of Statehood
—Chris Wickham “Framing the Early Middle Ages, Europe and the Mediterranean, 400–800”, Oxford, 2005.
—M. M. Postan

テキスト布置解釈学各論

各論

V

高橋 亨 ● 高橋亨の論文「近世源氏絵の享受と文化創造」（高橋亨編『王朝文学と物語絵』竹林舎、2010年）を教材として、文字テキストと絵画テキストとが相関する作品テキストと文化コンテキストの関係について講義した。平安朝から近世前期にわたる源氏絵を具体例として、その粉本などの一次資料をも提示しながら、冊子本と卷子本、小さな本と大きな本、白描（白黒）と彩色など形態的な特徴と内容や社会的な意義との関係について、まず概説した。近世前期の源氏絵では、武家の「源氏幻想」と結合した公的な性格の強い土佐派や狩野派による豪華な彩色本や絵巻

と、女性による素人的で私的な白描小絵に代表されるような作品群とが対比される。また、土佐派などの公的な性格の強い作品では天皇の顔を隠して描かない技法があるが、私的あるいはより大衆的な作品においては描くものもある。平安朝から鎌倉期の作品では天皇の顔を描くことが普通であったことから、その文化コンテキストの変遷と意義について講義した。海外に流出した源氏絵などの作品についてもふれ、その享受や解釈についての異文化コンテキストについても考察した。

阿部泰郎 ● 豊饒なテキストに満たされた世界である中世日本の寺社に形成された宗教空間を、文字テキストのみならず画像イメージと儀礼所作の諸位相のテキストが統合された場として捉える。これらを「宗教テキスト」として認識し、各位相のテキストの相関と布置を復元的に考察して、その世界像を再構築しようと試みる。

第一講では、日本文学をはじめ人文学研究の進展の中で特に注目されるに至った、中世寺院において形成——伝承される諸テキスト、とりわけ「聖教」と総称される文献群

を対象として、そこにあらたな〈知の体系〉を再発見する研究が推進されたことを述べる。この「宗教テキスト」の核となる領野の場（フィールド）である寺院の経蔵文庫について、近代の文献学的調査の経緯と、その目録学的アプローチから導き出された宗教テキスト体系の復原の事例を辿る。高山寺や仁和寺、真福寺などの調査を通じて獲得された知見と宗教テキスト解釈の方法および実践を、未来の人文学研究の可能性とするための方策を示唆する。○本講は、中世文学学会平成22年度春季大会シンポジウム「寺院

資料調査と中世文学研究」(2010年5月29日)の司会として企画、問題提起を行ったことに成果として反映された。

第二講では、寺院と並び重要な宗教テキストの場である神社について、熱田神宮におけるその諸位相を検討する。中世熱田宮に奉納された神典『日本書紀』が、時衆による和歌懐紙を用いて卜部(ウラベ)家の証本が書写された複合の意味を探り、また装飾経や細字法華経など経典が同じく宝前に寄進される意願を、勸進帳の解説と結び付ける。更に中世熱田宮縁起の形成を公文書の注進状に仮託した託宣記における神格の成立から、講式という儀礼テキストの、本尊となる本地垂迹曼荼羅の図像と結合した構造の許で体系化され、それらの世界像は神号に集約されることを指摘した。更にその神格の体系は、宝釧というシンボルとして密教のテキスト体系を介して中世宗教文化の言説(日本紀)と化して流布すること、また、中世神話として生成された熱田の神格は中世女流日記『とはずがたり』において、その最も尖鋭な動態が促えられていることを論じた。○本講は、神道史学会平成22年度大会の記念講演「中世熱田宮の宗教世界——熱田をめぐる宗教テキストの諸相」(2010年6月20日)に成果として公開された。

第三講は、中世寺院から日本仏教の全体に及ぶ範囲で信仰された聖徳太子をめぐる、その宗教空間を構成する宗教テキストの諸位相を考察することを通して、それらを統合し生成する統辞法を探る。古代から中世にかけて、法隆寺や四天王寺など太子遺跡寺院に祀られる尊格として、太子はそこに形成された宗教空間の主体となり、尊像や絵伝など、諸位相のテキストが院政期に集中的に造り出される。それは、“生身”性を強く帯びた尊像として儀礼と密接に結び付き、また伝記を説話画化した絵伝によって物語——芸能伝承の地平に連なり、舍利信仰を核として聖遺物などの宝物が取り巻く世界である。これに鎌倉初期には慈円が和歌など文芸の次元でも新たな創造を加える。更に親鸞の和讃や門下の念仏聖による絵伝(善光寺如来絵伝や祖師絵伝を加えた絵伝複合)の唱導を介して、民衆教化のアイドルとして太子の宗教空間は全国に展開流布することになる。これらの太子宗教テキストの構造こそは、中世宗教テキストの座標として最も典型的な例といえよう。○本講は、日本宗教文化史学会第十四回大会の記念講演「聖徳太子の世界像——太子をめぐる中世宗教テキスト体系の生成」(2010年6月26日)においてその成果を公開した。



Reconstitution de papyrus grecs fragmentaires : trois rouleaux fiscaux d'époque romaine conservés à Strasbourg

ギリシア語パピルス断片の再構成——ストラスブール大学所蔵ローマ期の徴税関連三卷子本

張 瑞林 博士(ストラスブール大学(CNRS 研究グループ) 研究員)

2010年7月20日 15時—17時

張瑞林博士は、1971年に台湾に生まれ、故国で政治学を修めた後、フランスに留学し、ストラスブール大学で古典学を専攻し、今年5月に『ローマ期ヘルモポリスの徴税文書』で、ストラスブール大学とハイデルベルク大学両大学から歴史学の博士号を取得した。

このたび博士が台湾に一時帰国した機会を捉えて講演をお願いし、実現したものである。

講演の主題は張氏が博士号取得論文として提出した内容を、1) パピルス文書の物的、2) 復元成ったパピルス文書の概要、3) 記載項目のミクロな内容、4) 勘定口座と遠距離決済、5) 記載事項のマクロな関係—三卷子本の相互関係、6) 卷子本はどこで編纂され、保存されたか、の6項目を柱に纏めたものである。内容の性格上それは講演というより、演習に近い形式と成ったが、知的スリルに富み、学術的に極めて興味深い内容であった。

まず驚かされたのは、断片化したパピルス文書を卷子本形式に復元するための手法として、「アルキメデスの螺旋」という数式を首尾よく活用できていることである。こうした技術的手段の印象的な利用は、ギリシア語書体の同定や、鏡文字の再構成、あるいは異なる二断片間の先後関係の確定のために、デジタル画像をヴァーチャルにオーバーラップするなど、これまでにない画像技術の駆使にも表れている。

パピルス断片群はトラヤヌス帝治下のエジプト、ヘルモポリスにおいて、税徴収のために作成されたとするのが張博士の結論であるが、重要なのはこれら文書が用いられるその仕方であり、この問題を手がかりに博士がその一端を明らかにした、紀元後2世紀初めのエジプトにおける金融・銀行組織のただならぬ発達ぶりである。博士の研究は、税の現物徴収にせよ、貨幣による徴収にせよ、担税者の勘定

口座にしたがって、物資、貨幣を直接移動させることなく遠隔地間で決済する方式が定着を見ていた可能性を、ほぼ間違いなく解明している。この学位論文への審査委員会の

評価が、ストラスブール大学では「exceptionnelle」、ハイデルベルク大学では「summa cum laude」とされたのもむべなるかなである。
(文責：佐藤彰一)

Essai d'herméneutique d'une rumeur historique au Moyen Age : l'inceste de Charlemagne et de sa soeur

中世史に残る噂をめぐる解釈学試論——シャルルマーニュと妹の近親相姦をめぐる

フィリップ・ヴァルテール 博士(グルノーブル第3大学教授・イマジネール研究所所長)

2010年8月30日(月)15時—18時

中世フランスにおいて、『ロランの歌』の英雄ロランがシャルルマーニュと妹ジゼルとの近親相姦から生まれた息子であるとする噂が広まっていた。この噂がどのようにして生成・伝播し、そしてどのような意味を有していたかを、とりわけ神話学的な観点から探る試みが、講演の主題である。

ヴァルテール教授は近親相姦のテーマに焦点を定め、この噂について三つの観点からの解釈を提示する。すなわち、カロリング家が実践する近親婚に対する教会の批判というコンテクストを考慮する「史実に基づく民族学的な解釈」、中世フランス王国において神聖ローマ帝国に対抗してシャルルマーニュの価値を下げようとする動きがあった点を重視する「イデオロギーに基づく政治的な解釈」、そして近親相姦を英雄誕生との関連で捉える「神話学的な解釈」で

ある。「キリスト教神話」の専門家でもある教授は、この最後の観点に基づき、中世におけるジゼル伝説の探求に取りかかり、ハンセン病患者になったジゼルがリス川から引き上げられた魚を食べることで病気から回復するとする伝承の存在を突き止める。かくしてジゼルはロランを「身ごもる」のだが、聖人伝史料はこの事実を覆い隠しているとする。

講演後一時間近くにわたって質疑応答が交わされ、ロランの實在の問題や、シャルルマーニュの評判を下げる試みの形成などについて議論されたが、いずれの問題に関しても写本の綿密な調査の必要を強調されていた点が印象的であった。
(文責：加納 修)

h オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムでは21世紀COEプログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバルCOEが名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバルCOEオフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2010年7月以降に開催した2回の要旨を紹介します。

第29回 『百科全書』に解釈学はあるか

クレール・フォヴェルグ 特任准教授(名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学)

2010年7月14日(木)
18時—19時

『真理と方法』において提示されるガダマーの解釈学はおそらく百科全書的ではないだろう。では反対に、デイドロとグランベールによって編集された『百科全書』のうち解釈学はあるのだろうか。あるいはさらに、『百科全書』と現代の哲学解釈学の間に接点はあるのだろうか。というのも、一般に受け入れられている考えに反して、啓蒙思想は解釈的行為を無視していないのである。『百科全書』を構成する科目は多様であるため『百科全書』は論証的になりきれないが、その分いっそう解釈的行為は重要になる。つまり、『百科全書』は説明的である点にその特徴がある。『百科全書』とガダマーの解釈学は、知識の現実化(actualisation)を問題にすることで共通している。『百科全

書』は、知識の現実化を容易にするように構想されており、それによってまた知識の関連は読者にとって可能なかぎり知覚できるようになっている。『百科全書』は、いつか現実化されるよう運命づけられていて、その時代の先を行き、知識の進歩を先取りし、すべての知の同時性を目指しているのであろう。というのも、もっぱら我々の知識の進歩にのみ依存する真理は、すべて一時的である。例えば、哲学体系に属する原理はそう言える。しかしそれにもかかわらず、哲学の歴史は、真理がすべての哲学体系の目的であることを明らかにするのである。

従って、『百科全書』は、諸々の知識の輪を構成する多数の観点を真理の源泉として理解する。『百科全書』にと

って理解するとは、多様な観点の収斂する点 (convergence) を知覚することなのである。もしも『百科全書』の中に解釈学があるとすれば、それは『百科全書』がテキストであると同時に、諸々の人間的知識の連鎖の原理でもあるから

である。テキストの次元においても、また観念の次元においても、『百科全書』は、そのうちに書き込まれているのが発見される解釈学を予想しているのである。

第30回 日本古代の戸籍・計帳と死亡人の把握

2010年9月15日(金)
18時—19時30分

古尾谷知浩 准教授 (名古屋大学大学院文学研究科・日本史学)

最近、すでに死亡しているはずの高齢者が戸籍に登録されたまま残っている事案が問題となっている。マスコミは興味本位で取り上げているが、戸籍から削除する手続が届け出制に依っているのであれば、当然生じ得る事態である。現在につながる近代の戸籍制は1871年(明治4)に作られたのであるが、古代の律令国家も所謂「個別人身支配」の建前の下、戸籍を作って民衆を支配しようとしていた。今回の報告は、その実態を再検討し、「個別人身支配」の内実を明らかにしようとするものである。

古代の律令国家は、戸籍や計帳によって人々を把握していた。戸籍により氏姓・身分を確定するとともに、これを班田収授の基礎台帳として口分田を班給し、計帳を課税台帳として成人男子から調や庸を徴収したのである。しかし、

行政の実態をしめす一次史料を検討すると、地方行政機構における民衆把握のあり方は、令制の原則通りにはなっていないことがうかがえる。

そこで、まず、令および延喜式などから制度の枠組みをpushした上で、正倉院文書として残る戸籍・計帳や、出土文字資料にみられる関連文書を検討し、実際の戸籍計帳作成業務のあり方を明らかにする。その際、死亡人の把握という点に特に注目したい。人の死亡は人口変動の重要な要素であり、これを行政側がどのように把握したのかという点は民衆支配の面で不可欠な論点である。

こうした考察を通じて、律令国家が支配を行うための枠組みと、現実に存在する社会との間の乖離の問題や、行政機構による両者の照合、修正のあり方について検討する。



グローバルCOE 研究員 ブリーフィング ⑩

グローバルCOE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテキスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバルCOE オフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

小林 智 ● 明治20年代の判決文に見る「第三者」への対処

いわゆる旧登記法(明治20年施行)第6条は、登記に関する対抗要件主義を規定していた。当時、その文言上、登記なしには物権変動を対抗しえない第三者の範囲について、その者が契約当事者間の物権変動につき既知か否かを問わずその範囲内に含まれるとする見解と、既知である者をそこから排除する見解とが対立していた。そこで、当時刊行された書物から、それぞれ対立する立場に与したことが知られる2人の判事について、彼らが各々、合議体の一員として関わった

事案をいくつか参照すると、実際には、第三者の主観的態様がただちに問われることは少なく、契約自体の成否といった客観的要素の吟味に基づき、結論が導き出されていることがわかる。

したがって、第三者の主観的態様をめぐる学説上の対立が司法的判断に直接的に反映する場面は限られているように思われる。ここには、第三者に関する学理の習得と司法的判断との相互関係をあらためて問う余地がある。

海外出張報告

啓蒙期の法テキスト解釈を問う国際研究会打合せ 森際康友

6月27日マックス・プランク(ヨーロッパ法制史)研究所にて、前所長のミヒャエル・シュトライス博士ほか1名と、来る9月末~10月初のバリでの国際会議 "Interpretation by Another Name: Interpretation of Law in the Age of Enlightenment" 「解釈、そのまたの名は？」について打合せを行った。ドイツからの参加者を確定し、会議での獲得目標について確認した。テキスト

解釈をとおした研究によって、18世紀ヨーロッパにおける法解釈について定説を打ち破る地平を切り拓き、この問題に関する知を標準化することである。別件の国際会議に向かう途中の駆け足の打合せであったが、バリ会議開催にとって重要な意義を持つ会合であった。(事業推進担当者・法哲学、法曹倫理)

第3回●10月20日(水) 15時～17時

森際康友

「近代哲学のアポリアを哲学的解釈学はどのように解くか——
解釈とテキストについての共通理解のために」

2010年10月20日、名古屋大学文学研究科大会議室で、事業推進担当者の一人として、この共同研究プロジェクトの成果を確認するために研究発表を行い、哲学および法学の観点から〈テキスト〉及び〈解釈〉の概念について、共有できる概念・定義を提案した。

解釈学の哲学的意義は、近代哲学のアポリアを解く可能性にある。そのアポリアとは、「知識はいかにして可能か」という難問である。近代的人間観によれば、人間は主体的存在であり、合理的な人生計画を立て、それを実践する能力と権利がある。すなわち、人間は自律という意味で自由である。主体的に行動するためには、人間には知識が不可欠である。その知識はいかにして可能か。この一見問うまでもない問題が答えられそうにないのである。その理由は、二項対立的な知識観、図式にある。知る主体と知られる客体の二元的な構成では、超越的な主体が超越的な客体についてある適切な信念を抱いて初めて知識があるといえる。しかし、このような超越的存在間の何らかの意味での合致というものは、神の目でなければ確認できない。人間は神でないがゆえに、答えは得られない。

この構図における様々な解決の試みが悉く失敗していく中で、新たな構図を構想することによって、解決が可能な地平を切り開いたのは、M. ハイデッガーであり、それを展開したのがH.-G. ガダマーである。彼らやL. ヴィトゲンシュタインが指摘したのは、この構図にあって隠れているもの、すなわち言語の存在である。主体・ことば・ものという三項図式で問題を捉え直すと、知識論のアポリアはことばによる情報伝達の問題に置き換えられそうである。後世の人たちは、これを「言語論的転回 linguistic turn」と呼んだ。ここでは、解釈は、知識を得る行為を適切、精密にする営みと捉えられる。

知識の伝達の際には、ことばは透明で意識されない。が、それは意識的無意識的に不透明にすることが可能なものである。たとえば詩作や言い間違いによって、不透明になることによって顕在化する言語の性質を研究することによって、その透明化の条件、より厳密には知識伝達におけるその機能と構造が探究できる。言語に関わる習律 convention を活用することで発言を以て行為する次元に着目した言語行為論はその試みの一つである。意識的に制定され、解釈を通じて精密化される習律を用いる言語行為、すなわち契約やその解除という法律行為の分析、また、得られる帰結がより正義に合うことを目指して行われるその法解釈の研究は、解釈というものが持っている機能とその機序を一際明確にするものである。

たとえば、次のような構図が浮かび上がる。私たちは、規制理念として真理や正義というものを立てて、その理念が持っている絶対的な権威に依存して、人間に可能な限りで完全に信頼可能な信念、すなわち知識に近づくべく解釈活動を行う。このような活動によって得られた実定的集積、法の場合では判例の蓄積とそれがその一部をなす法文化において、解釈の対象となる契約や条文を解釈する。このように伝統に埋め込まれ、布置された法テキストを解釈することによって、法文化・法伝統による法の権威を保存しつつ、新たな解釈による事案の合理的な解決、すなわち、より正義に適った見方を提起する。こうしてテキスト解釈を通じた問題解決によって、正義についての我々の世界理解・知識を前進させるのである。

ここに見受けられる解釈の機能とその機序とはどのようなものか。J. ラズらが指摘するように、解釈にはこのように前向きと後ろ向き双方

の要素がある。解釈である以上、それは何かについての解釈であり、その解釈される同一の何かが後ろ向きの部分であり、解釈の蓄積による伝統の権威を保持するものである。諸々の解釈を受けつつも同一性と権威を保ち続けるその何かを解釈することによって、新たなものの見方が現れる。こちらが解釈における前向きの部分である。このような、古いワイン袋とそれに注がれた新たなワインとの関係に対応する、被解釈命題とその解釈内容によってこのヤヌスの構造が機能するのである。

このような解釈を制度的に可能にするものとして、一方の極には法システムがあり、他方の極には例えば口承文学の伝統がある。重要なのは、ここでは解釈を支える制度が慣れ親しんだ習律の体系として存在し、それは構造上、開放されている (oeffentlich) ということである。この開放された習律の解釈を通して拓けゆく言動空間、法の場合は、そこで正義問題解決のために法テキストの解釈が行われる。これもまた解釈であり、解釈はこのような入れ子構造において営まれる。

このような見方によれば、テキストとは、書かれたテキストがそこにおいて布置されている (configured) 解釈伝統であり、それは真理・正義といった価値によって規定され、解決を要求する問題群 (Problematik) を集約した書かれたテキストとして登場する。

それゆえ、テキスト解釈には3つの次元がある。すなわち、

- ① (行為として) 解釈とは、通時的遺産 (heritage) ・共時の手がかり (clues) を活用して、書かれたテキストに新たな理解をもたらすことによって問題群を解決可能な形に布置し、主観的な問題を解く営みである。
- ② (所産として) 解釈によって、被解釈テキストとして同定されたものが新たな相貌を呈し、以て拓かれた新たな地平において、諸々の問題が新たに、あるいは新たな布置・意味づけのもとに登場することである。
- ③ (効果として) 解釈は、行為者が合理的ならば、問題に対する新たな探究指針・行動原理を生み出す。

当日は、このテキスト解釈観の原型を提起したところ、熱心な討論が行われた。報告者はその後、論議を省察し、上記の定義に到達することができた。出席され、討議に参加して下さった皆様に感謝申し上げますとともに、さらなる検討による共同の成果を期待するものである。

大学院学生海外派遣事業審査結果 ● 2010年度第2回

2010年度グローバルCOE「大学院生海外派遣プログラム」第2回採用者が決定しました。

●市川 彰 (考古学 D1)

「メソアメリカ考古学史再検討のための基礎的研究」(メキシコほか)

第11回国際研究集会の開催について

第11回国際研究集会「文献学と解釈学の間」

日程：2010年12月10日(金)・11日(土)

場所：名古屋大学文学部1階大会議室

名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

事業推進担当者の異動

事業推進担当者の鎌田隆行講師が転出のため任を離れることになりました。今後のいっそうのご活躍を祈念致します。